

京都鹿子祭特集号

# 京鹿子



1月号

京鹿子祭特集号

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 その五十二



初 霜 の 夜 小 面 に 小 さ き 翳  
切 干 の 日 を 零 し て は 日 を 扱 む  
切 干 を 解 く 日 と 風 と  
信 楽 へ 一 里 の 標 柿 落 葉  
冬 蝶 の 日 を 零 し た る 別 れ 際  
深 海 に 埋 も る 猫 や 小 六 月

聖夜の灯子らのトングの燥ぎだす  
寄る波へ蘆刈る音の二人の和  
待春や二円切手の兎跳ぶ

西教寺五句

冬蝶の背負ふ御霊や西教寺  
綿虫の不断の鉦に影持たず  
大琵琶を一景にして紅葉寺  
一枚の紅葉の寄進弥陀ごころ  
冬霞三十六峰裏返す

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁



おでん

七癖のひとつ断ち切るおでん酒  
おでん屋の湯気の向かうの密ひそばなし  
凍蝶の目に幾山河残しけり

— 追 懐 —

理由わけありの鴉啼く日の雪催  
寒星や父の字にある髭たかの威  
〔平成十三年作〕  
〔平成十三年作〕

近詠

和田 照海

島の秋

椎の実のよく跳ねる日や句碑日和

風韻や句碑の小径の三十三才

雁木より跨ぐ渡船や島の秋

銀漢や灯のまばらなる浦三里

傘いらぬほどの日照雨やシヨパンの忌



松本 鷹根



師を偲ぶ

山茶花の純白仰ぎ師を偲ぶ

新酒酌む齡馴染の友ありて

木犀の黄金撒き布く庭朝日

小春日の庭畑均らし種を選ぶ

青空に幸あり榎植笑みの熟れ

## 近 詠

塩貝 朱千

令和令月

晩秋の天の橋立ふみもせず

空と湖溶けゆくところ白鳥来

人悼む令和令月菊薫る

秋ざくら石蓋重き御朱印庫

水軍の海図に眩暈つばめ去ぬ

## 英華採集

生も死もたかがひと文字そぞろ寒

京都岡本一路

人間の命、即ち「生」として存在が始まるのは母親の胎内からである、と或る僧侶から聞いたことがある。俗に言う誕生までの十月十日間も人間の齡と言える。とすれば、「死」も不幸にして母親の胎内で亡くなるのも又長寿を全うして「死」を迎えるのも同じ「死」となる。定められた運命として片付けられるのが「生」と「死」。その「生」と「死」も漢字一文字で括られる、と達観した作者の胸の内を察すれば季語を「そぞろ寒」と置いたことに理由付けは無用となるであろう。

まん月やおもしろく生きかろく死ぬ

鎌倉平佐和子

偶然とは言え和子作品も生と死を題材にしているが、その考え方は百八十度違う。「生」と「死」の捉え方が、人それぞれであることに人生の面白さがある。掲句は、「たかが人生されど人生」でありどうせ生きるならポジティブ思考で行こう、と決めた作者の屈託のない人生観が滲んでいる。「かろく死ぬ」と置いた結びは、その真骨頂と言える。作者の天真爛漫な生き方に満月が煌々と照らしており、「まん月」の表記も柔らかく作者を包んでいるようだ。

烏瓜蔓は奔放実は孤

福岡野口宗久

烏瓜は、蔓が存在することによってその神秘性を持つていえるのではないか。逆にその神秘性を隠したいが為に蔓を蔓延らせているとも言える。烏瓜は、蔓を奔放に遊ばせることによって自分自身を守っている。身を守ることが孤独へと繋がっていく。烏瓜を違った角度から捉えた俳句的思考・発想が実に鮮やかである。

# 神麓集

ベコニア

藤岡紫水

定まれし晴れ四、五日や小鳥来る  
ほぐれんとして白菊のうすみどり  
裸婦像の目にベコニアの雨やさし  
小六月ひねもすころん神の鈴  
義理不義理身に余らせて冬に入る

老の春

沼田巴字

寒牡丹己を捨ててひたすらに  
橋上に経読む僧や風花す  
無私といふ仏の教へ去年今年  
変幻自在の楽しさありぬ老の春  
どこまでが安穩なるや老の春

夜霧

丸井巴水

台風に煽られ不意に鳴る電話  
十六夜はフランソア出でてより  
膝小僧やさしく撫でて萩括る  
再会を契りしままの夜の霧  
触れ合ひし落葉の別れ蹴躓く

お元日

植村蘇星

励ましの一言嬉しお元日  
先哲の戒め確と初詣  
身上を越ゆるはげまし年始め  
すべからく此の世に感謝年新た  
ホ句に生き生かされ与生年新た

# 神麓集

冬の蝶 北川孝子

川底にゆれる夕陽や冬の蝶  
ながらへてもろもろの思慕冬の蝶  
人生の通過点過ぎ冬ざるる  
早起きの足のうれしき霜日和  
余生なほすこし華やぐ師走の灯

秋 思 直江裕子

鶏頭の赤極まりし憎さかな  
吾亦紅きのふと違ふ風掴む  
行く秋や立ちどまらねば行けぬ場所  
沈黙はどんな音する秋思かな  
夕もやにゆつたり閉ぢる白木槿

救ひの手 高木晶子

吾亦紅真綿のやうな救ひの手  
暮早しおじぎの深きちやわん坂  
背景を替へコスモスの生育地  
稲光艶なる母の記憶なし  
小菊束小菊の似合ふ手に渡す

晩秋の森 伊藤希眸

生き足りて尚あまさずに柿を食ふ  
夕きざす野に蕎麦の実を膨らます  
実の反骨ぶぎつと踏まれ鶉は梢  
晩節や秋雨に靴濡れはじむ  
吹く風の晩秋の森湖に運ぶ

# 神麓集

鸚 鵡 奥 田 筆 子

秋の川渡る無神論者の白猫  
瞑つむれば猫科の眼に婆の秋  
王のごと鸚鵡のごとく冬麗や  
初蝶にもうなつてゐる遺稿  
花ミモザ濃き鉛筆でうすく書く

冬 林 檜 井 上 菜 摘 子

梟のおのれの声をさびしめり  
冬の雷シースルーのエレベーター  
続編のふいの打切り冬林檎  
彼所までのいのち綿虫もわたくしも  
雪原の一木風のARIAかな

風 の 章 村 田 あ を 衣

萩日和秘めごともなき眼鏡拭く  
秋の声こころ真水にしておかむ  
秋のこゑ稿せかさるる風の章  
秋高し一村統ぶる鳶の笛  
十三夜妣の合鍵錆ぬまま



# 京鹿子大賞受賞作品

大阪市

## 本郷 公子

みどりの夜快癒のたより再読す

落日の湖を従へ稲架襖

点滴の音なき音や梅雨の月

短日や秒針の音闇に生る

凌霄花やガーゼの被ふ注射あと

一葉落つ閃光走る天目碗

秋草摘む斎王のつれづれに

綿虫や大阪城の非常口

白桔梗詫び住ひてふ嵯峨日記

純白の祈りの塔や京早春

終列車の尾灯虫の闇残し

犬ふぐり空の青さへ花殖やす

水煙の飛天の衣花の雲

たましひの光は翳へ秋の蝶

鳥帰るもう動かない古時計

数へ日や雲負ふ雲を見てゐたり

花桐の夕づく空や殉死塚

釈迦堂の遺墨をたどる雁のこゑ

芒種の日幸せの種身ほとりに

底冷の膝へ集まる阿弥陀堂

空蝉のぬくみを残す明けの鐘

まづ一献志野の小鉢の露のたう

さはやかや罫線青き旅だより

覗き込む子らの輝き犬ふぐり

野紺菊母の匂ひの日暮れくる

すみれ草神の氣配の石階段

手に享くる延命水へ月しづく

詠懐を空へ遊ばすしやぼん玉

短冊ゆれ今日宮萩の晴れ舞台

身に入むや秒打つ亡夫の腕時計

# 花 洛 賞

岡山市

佐藤  
千恵

あめんぼう餓鬼大将がやつてくる  
さびつきしままの門夏の星  
源平の屋島を射ぬく流れ星  
廃校の錆びし鉄棒緋のカンナ  
銀河濃しふはりと沈む旅枕  
走り書き残しいづこへ秋の蛇

桐の実を鳴らし風ん子ちりぢりに  
短日や植木鋏の音尖る  
極月の火花ちらして刀鍛冶  
もしもてふうつろな言葉寒昂  
冬紅葉ひらりベンチの予約券  
省略を効かせすぎたり冬の薔薇  
朧夜のアンモナイトの動き出す  
母の日の花束嬰のやうに抱き  
新緑の移ろひ刻む腕時計

# 花 洛 賞

福山市

北村

梢

夏の浜母と言ふ字に水平線  
良き便りとどく朝や燕の子  
八月の空押し上げてコココーラ  
青柿落つ忘れてゐたる父の声  
おく嵯峨の主になりきり赤蜻蛉  
秋風を耳伏せて待つ盲導犬

身に入むや殺生石に風の声  
晩秋のひかりの中に父がある  
忘却といふ字を忘れ小春かな  
冬うらら埴輪は丸き目で眠る  
葉ぼたんの渦の芯より京ことば  
春野ゆく右脳のかけら拾ひゆく  
寒星や人に孤独といふ時間  
今生きるいのちを秘めて牡丹の芽  
花文字のメール届きてうららけし

青

秀

賞

福山市

政時

英華

山巔は雲湧くところ  
朴の花  
土塀に影の張りつく炎暑かな  
終電の膝にたたまれ夏帽子  
鰯雲少年ある日声変はる  
猫じやらしはや身につきし遊び癖  
曼珠沙華あの日嘘はもう時効

秋蝶ふはり句読点なき暮らし  
時刻表屏風だたみに秋惜しむ  
小春日やすんなり通る針の孔  
百選の刻の鐘待つ小春風  
お世辞てふ良薬効きて冬ぬくし  
冗談の利かぬ漢の懐手  
余寒なほ予備の釦は内側に  
さりながら騙されにゆく万愚節  
取り敢えず変へた髪型髭草

暮秋大作賞

岡山市

佐藤千恵

屋島幻影

遥かなる一の谷より鰯雲  
秋あかね群るる讃岐の船隠し  
吹き返す浦に消えたり黒揚羽  
纜に時淀ませて葉月潮  
潮焼けの腕は与一か楷古りぬ  
いりあひの金波銀波や浮いて来い

白萩の風のうねりも平家琵琶  
月天心この世かの世を照らし出す  
たまゆらに遠き雄叫び新松子  
若武者の影に秋思のゆらぎをり  
盃を共に重ねむ月今宵  
すこしづつずれゆく話秋扇  
吹かれては花野となりぬ戦跡  
落人の幻影風の赤まんま  
屋島より八十島かけて秋の虹



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

リハビリの節目の一步小鳥来る

京田辺 山中志津子

病棟は秋の虫籠ナースベル

青銅のひびきはたりと霜の寺  
雁渡し手紙の嵩の捨てられず

城陽 鷺山 珀眉

月見草咲き継ぐ昔語りかな

手鏡に野分ぐもりの疼きかな

濁点のやうな野小屋や竹の春

木の葉降る空一面の Rond より  
到来のワインの新酒セ・シ・ボン

秋水の一滴を足す私小説

コスモスや返事はもつと揺れてから

萩叢を抜けたしかめる現在地

京 都 井尻 妙子

シャンパンの泡の昂ぶり星今宵

秋の声白い記憶の中で聴く

京 都 片山 熙子

珈琲は微糖月夜のカフェテリア

どの風に攫はれやうか草の絮

からす瓜熟れ盛り上がる昭和論

オンブバツタも育メンですか夕べ来る

神の旅無人の駅の忘れ傘

萩の虻何をするにも体当り

秋寂びて杜の魑魅を眠らせる

福山 亀井 福恵

露しぐれ軒低く住む浦十戸

皿一つ置く新涼の音ひとつ

ここよりは神の領域穴まどひ

うぶすなの絵馬古るままに遠ひぐらし

蔓引けば藪さわぎ出す烏瓜 福知山 西村 白村

少女羽化はじまる恋のうすもみぢ

雀のやうに降る降る秋の落葉かな

秋の蚊のしぶとく纏ふ首の筋

不動尊蛇の惑ひを解きにけり

白壁に影あそばせて木の葉かな 京都 菊池 和子

新酒くむ七分の愚痴は許されて

鳥よりも濃き鳥の影秋のこゑ

合せ鏡に知らぬ私がある夜長

透き徹るといふも色なり水の秋

柚子明かり宮の金鈴鳴りわたる 高槻 安田 優歌

色白の項うす紅新酒注ぐ

水響わたと火音伏見の新走り

シヤガールの恋の浮雲秋光る

禁教の里に広がる柚子たわわ



生も死もたかがひと文字そぞろ寒 京都 岡本 一路

二つ知り三つ忘れるそぞろ寒

そぞろ寒地酒ゆつくり囁んで呑む

秋の田に置き忘れあり鎌ひとつ

まん月やおもしろく生きかゝるく死ぬ 鎌倉 平佐 和子

枝豆のぴよんと飛び出す養生訓

AIのひばりが唱う星月夜

近頃は名前出て来ず石たたき

烏瓜蔓は奔放実は孤独 福岡 野口 宗久

夜の雨静寂の深し秋の声

母と居て会話の途絶ゆ秋の声

御座船の白き舳先の素秋かな

往年の踊り手さらば秋扇 アリゾナ 伊吹 之博

芸の道師の捨て扇床の間に

元米兵と語る夕暮れ終戦忌

新豆腐路地裏午後のラッパ音